



@\_shuto\_filmsss

〈三年〉

僕らのスコーク 77 / 栄 亜由夢

ねえ、君は覚えてるかい。

僕らが出会ったあの日を。

あの頃の僕は、暗い暗い夜をもがいて、ふらりふらりと寄る辺もなく歩いていて、形も色も正体も分からない、漠然とした「何か」を恐れている。

このまま僕はどこに行くんだろう  
うと、このまま僕は何になるんだろう  
うと、あるいは何にもなれないまま  
なんだろうかと、ずっとずっと息苦  
しかった。

辛いわけじゃないんだけど、辛い。  
眠たいわけじゃないんだけど、この  
まま眠りたい。死にたいわけじゃな

いんだけど、生きたくない。僕だけが  
そうじゃないって事は知ってる  
けど、でも、生きたくない。

いつそいつそ、消えてしまえたら  
諦めるのに。いつそいつそ、全部壊  
れてしまえば楽なのに。このまま、  
瞼が開かなければいいのに。

そんな時、僕の前に現れた君は、  
僕と同じだったんだ。暗くて、息苦  
しそうで、ここじゃないどこかに行  
くんだと手を伸ばしていた。

厚い厚い雲の先、きつとそこにあ  
るんだ。この入道雲の先に、私が欲  
しいものが浮かんでいるんだ。強く  
願う君に、僕はそうだといいいねと言

って、そっと君の手を取った。君は  
ずっと悲しそうだった。

君と一緒になら、僕は生きていける。  
僕ら二人なら、どこにだって行ける。  
そう思った時、ようやく暗い暗い夜  
が晴れた気がした。

ねえ、君は覚えてるかい。  
いつか、こんな世界捨ててしまお  
うねって笑ったあの日を。

青空に線を描く、行く先も分から  
ない飛行機を見上げたあの日々を。  
眩しすぎると目が痛いから程々  
でいいね。綺麗すぎると恐ろしいか  
ら汚れてるくらいがいいね。そうや

って、僕らが向かうべき場所の事を妄想していた。

いつも妄想していた。僕のポケットには二枚の航空券が入っていて、君が死にたいと言ったとき、もう嫌だと泣き喚いた時、それを取り出すんだ。

もう、こんな場所から逃げ出そうよって。もう、ここじゃないどこかに行こうよって。もう、全部全部投げ出そうよって。もう、それでいいよって。それがいいよって。それで終わりに行こうよって。そうやって遠くに行くんだ。ずっとずっと遠くに。

僕らが目指すべき場所の事を、僕

らは何も知らない。でも、よく知っている。寒いかな、きつと暖かいよ。雨は降るのかな、偶たまにね。怖いかな、きつと優しいよ。寂しいかな、少しだけ。美しいね、そうだね。遠く離れたものは美しく目に映ってしま

うんだね。寂しいと、美しいんだね。いつか一緒に行くからさ。いつだって飛び出せるからさ。もう少しだけ待ってよ。もう少しだけ待ってよ。そう思った時には、少し遅かったみたいだった。

君のポケットからは、一枚の航空券がはみ出していた。

ねえ、君は覚えているかい。

初めて僕の前で涙を流したあの日。

初めて僕の前で作り笑いをした日。

初めて、僕に別れを告げたあの日。

君の言葉が宙を舞って、雲になって雨になってそれが僕を打ち付ける頃、僕はどうしようもなく泣きたくなっただ。でも、涙の代わりにもならないような雨粒が頬を伝うだけだったんだ。

君の隣にいられると思った。君と手を繋いでいられると思った。

いっせーので、君とここを飛び出せると思ってた。それは僕だけかもしれないけど。

君の頬に触れようとして、君の髪を撫でようと思つて、君と唇を重ねようとして、それで、それで、伸ばした手は、君の涙を拭いた。

一人で行くんだね、そうだね。もう会えないんだね、どうだろうね。さよならなんだね、そうだね。

夜が晴れた。雲は晴れた。眩しくて綺麗な青空が広がった。寂しい心

には、痛くて苦しくなるような空だった。

一枚の航空券を持った君は、遠い空へと消えていった。ずっとずっと遠く、ここじゃないどこかへと行ってしまった。

ねえ、君は知っているかい。

澄んだ青空が君の瞳だった事。

厚い入道雲が君の言葉だった事。

描かれた線が君の足跡だった事。

僕の手に残った体温が、まだ僕を

離さない事。

ねえ、君は知らなくていいよ。

君に伝え忘れた言葉があった事。